
アラシのごとく！

猫耳執事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラシの「とくべー」

【ZPDF】

N1276BA

【作者名】

猫耳執事

【あらすじ】

サンタさん（こく・若）の部のミスによつて死んでしまった

主人公のお話

これからハヤテの「とくべー」の世界で頑張つて生きます！！

プロロ・グ（前書き）

馱文です。

この小説の今後は読者の皆様しだいです。

ヒロインはヒナちゃんがいいな？

作者の更新速度は感想 + お気に入り + 評価で決まります。

プロローグ

みんな聞いてくれ、今俺の目前に変なおっさんかい
るんだ。

上から下まで赤と白のめでたそうな衣装を纏つて真っ白なお髪を蓄えたおっさんがいるんだ・・・・・・見るからにサンタの格好をしたおっさんがな！――

しかも

「お～まえは死んだのだよお～若者よ～

す「」く聞き覚えがある声をしてるんだ！..ド ゴン ルのセ や
某魚介類だらけの国民的アニメのア ドさんの声なんだつ！..

「い～～かげんにこちら話を聞きたまえ～～」

「なんですか？わかもた・・・・・・とこりであなたは誰ですか？」

「君に素う晴りしこノプレゼントを贈りにきたか～ンタセコだよお～（キラシ）」

「…………とまあえず、クリスマスは過ぎてしまふよ?」

「そ～んなことほわ～かつてゐよお～。君は馬あ鹿なのかねえ～～？」

「（イラッ）なら何しに来たんですか？もう新年なのでサンタなんか呼んじゃいませんよ?と言つかこ何処だよ？今すぐ家に帰せ馬鹿野郎！」

「いや～、ちよ～ッとしたミスでねえ～、君の家に部下のソリが突っ込んでしまったのだよハ～ハツハツハツハ。そのソリが君に直撃してしまってねえ、君は新年早々死んでしまったわけなのだよ～。その部下は今頃北極圏のどこかでトナカイに引き～ずりまわされているだろ?～～ふるるあああああ～！」

「はあ？！何言つてんのおま～そ～んな訳で～、神や魔王とよく酒を飲んだりしてい～るう、こ～こ～やさしいサンタさんが、きみに新しい人生をプ～レゼントしちゃうぜえ、ハイ拍手う～～！」

「てめえ何わけのわか～「ハイ拍手う～～」おま～「ハイ拍手う～～」だか～「ハイ拍手う～～」・・・（パチパチパチ）・・・死んだのは分かつたけど新しい人生つてどういうことだ？～！」

「か～みちやんとま～おちやんにた～のんでみたけどよう、『流石に生き帰せれねえわ～～（笑）』って話だから我慢してくれい。後に戻りはできねえ、生前の記憶は適当に消しておくから覚悟しどけえ。お詫びとこ～ちやあなんだが適当に特典盛り込んでおいてや～るから、じやあな若者よ～～、もつこ～へん死んだときによ～た念おつ…」

シャンシャンシャンシャンシャン

「うひょ、お前らなんだよつ！！俺をソリに縛り付けんな！！はあ？もつ出発？グッドラック？てめえらふぞけてんのか？！安全は保障できな～ってど～ゆ～ことだよ！！『カウントダウン5・4・3』お前ら覚えとけよ？！いつかぶん殴「2・1・0トナカイ型時空突破新世代ソリ試作機 タイタニック 発射します』その名前はありえねええええ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「」して少年は旅立つたのであつたあ。そりば少年よお、い～つかまた会おう。」

プロロ・グ（後書き）

感想待つてます + あなたの一番好きなキャラクターに対する一言も待つてます

そういうば原作で自分の好きなアニメ（ゲームだったつけ？）のキャラが違う二人（駄目主人と書記）が言い争うつてシーンあつたつけ・・・・・

第一話 紅いサンタクロース（前書き）

本当のサンタは黒色の衣装を着ていたそうです。

今の赤白サンタは、コカ・コーラのイメージキャラクターとして採用された際の物が世界に広まって標準化してしまったそうです。

第一話 紅いサンタクロース

（十六年前）

「」は安いと評判の産婦人科の一室。

つい先程ここで、また新しい命がふたつ生まれた。

その子たちの親は早速自分の子供たちに名前をつけるよしだ・・・

父「ハヤテだ、この子の名前はハヤテ。ハヤテと名づけよう」

母「まあいい名前。でも、どうしてなの？」

父「そんなの決まってるじゃないか母さん。借金取りから疾風の
よしに逃げられる強い子に育つてほしいからだよ」

「・・・」（赤ちゃんハヤテ、あきれて泣き止む）

母「ならもう一人のこの子はどうなの？」

父「そもそも決めてあるさ。ハヤテの双子の弟に当たる」の子
の名前はアラシ、綾崎アラシだ

母「ハヤテと同じでいい名前ね。でも、どうしてなの？」

父「簡単だよ母さん。借金取りを嵐のよひに呪きのめしてくれれる
よつな力強い子に育つて欲しいからさ」

「・・・・」（心中で「暴力で解決しようとするなんやー」
ヒツツコム赤ちやんアラシ）

母「へえ、それはすてきな名前ねえ」

父「だろー、僕天才なんだ。これでいつ子ども達を置き去りにして逃げることになつても安心だよ」

母「さすが父さんね」

父＆母「ははははは」

「つしてハヤテ、アラシと名づけられた少年達は、生まれた日から
完全無欠の能力を身に着けるべく、宿命づけられたのであつたあ。
(こゝ・若)

h a y a t e S H I D E

その日、夢に出てきたサンタに聞いた。

「ねえサンタさん・・・・・・・・どうして僕達にプレゼントを持ってくれないの？」

『それはね、お前達の家がビンボーだからだよ。』

「――（ガーン）」

サンタは噂以上に正直な奴だった。

「ええ！？で・・・でもそれじゃ僕達はビリしたらいこのせー？アラシにゲーム買つてあげるって言つちやつたのに！？」

『「働け少年！」「働かざる物喰つべからず」欲しい物は自分でどうにかしろ。だが信じろ・・・最後に笑つのはきっと・・・・ひたむきでマジメな奴だから・・・それでもお前達にはプレゼントはやらないけど』『てめえ――――まちやがれえ――――！』・・・・厄介な奴が来よつたのう』

『ハヤテ！こんな奴のいうことなんて聞かなくていい！――今は今すぐ俺が殺る！死ね！』このクソサンタ！――積年の恨みにここで晴らしてやる！――』

『ちよ、おま、去年よりもパワーアップしてね！？』――とか自分の兄の夢に乱入つてどんだけだよ？！』

『黙れ！お前が実行犯だつて事を知つた後から俺は毎日鍛錬を欠かさなかつたんだよ！某公式チートさんも言つてたろ？』「気合で何とかなる」つて！』

「（ポカーン）」

僕はこの後、自分の双子の弟がサンタを血まみれになるまでボッコ

ボコにする様子をただただ見ていくことしかできなかつた。

『ふう、これでいろいろスッキリしたぜ！』

弟のものすくいい笑顔がとても印象的だつた。

第一話 僕らとヤッサンのハハトワー（前書き）

お気に入りはまだ二件だと・・・・・

とりあえず二名の師様ありがとうございまス

総アクセス数が200を満たないこの現実・・・・・おれ、ガクツ

第一話 僕らとヤツサンのハハトワー

araside

生まれたときから前世の知識を完全に覚えていた僕は、幼児ゆえの羞恥プレイを乗り切り、幼い頃から夢に出てきた仇をぶん殴り（とてもつらい修行をしたことは言つまでもない）、自分の親の破綻振りを思い知らされながら生きてきた。

今になつてはサンタからもらつた特典とやらことでも感謝している。

新しい生を受けてから早16年・・・

今僕はとても焦っていた

「迂闊だつた！！都内から出れば流石にばれないだろつと思つてたのに！！」

県外の有名な万屋《決して万屋銀 んなんて名前じゃないからなつ！！》にアルバイトとして勤めていた僕は自分の考えの甘さを後悔していた

「これじゃ年が越せないよーーーまさか職場に押しかけて子供の給料騙し取つていくなんて！！」

「とりあえず、ハヤテと相談しないと。ハヤテ、帰ってきてる？」

『もし両親が借金してた場合、返済に充てるための貯金』を下ろす
しかないか・・・・

せつかく家から車で四時間はかかるような遠い職場を探したつて言うのに、それを見つけ出して「急に祖母の入院がしてしまつて……・アラシにはもう言つてありますからどうか今月分の給料前借させてくれませんか?」なんて言つて数十万全額持つていくなんて……・
しかも年齢を偽つて働いていたことまでばらして行つたせいで社員さんからば「流石に高校生をこのまま働かせるわけには行かないから……・やんと卒業したらぜひこの会社に来てね!!--」って言われて……・・・・・・・・気持ちは嬉しいですけど今お金がいるんですよ――

「こきなりどうした！……と、とりあえずその手に持っているものつすつじに柄の借用書から今の状況は理解したわ。とにかく逃げるが……」

『「ゴラア 綾崎い……息子達もうちに来たぞ……出で来いやゴラア……』

「ほり来たぞ……」ひちだ……早く……！

「わ、わかった……！」

「とつあえず差し押されの手が回る前に銀行から現金アホにしてくるから公園で待つて……！」

そう言ってアラシはどこかに行ってしまった……。いつの間に

貯金してたんだ？

それはさて置き・・・・あのタイプのヤクザは一億五千万なんて金額の借金を絶対見逃すわけがない！！

綾崎家の双子は両方とも長年の経験からどのタイプのヤクザかを一目で見分けられるというできれば一生目覚めて欲しくない能力を持つていた！！

彼らアラシでも一億五千万なんて金額を貯金してるはずがないし、そんなはした金持つて行つても臓器を売られてしまうのは確実！！

僕らみたいな人間が・・・・てつとり早く一億五千万作るには・・・・

・・それこそ強盗が身代金目的の誘拐くらい・・・・

こうして少年は勝手に一人で思考を突っ走らせて悪の道へ進もうとしていたのであつたあ（CV・本）

第三話 ロココノヒト育てたつもつはあつませんつーーー(前書き)

少し評価が増えて嬉しいですーーー。

ネロの命日 12/24

第三話 口っこくは止めてたつもつせありませんか――――

arasiSIDE

無事に通帳から全額下ろすことができた僕は、ハヤテとの待ち合わせ場所である負け犬公園（嘘じゃないよ！）に急ぎました。

卷之三

「人の獲物に手を出すなあ！！ネロの命日にナンパなんて！！お前らどこのパトラッショだ！！帰る家がある人はとつとと家に帰れ！」

大声で意味のわからないことをほざいている兄がいました・・・

まあ、小さい少女をかばつての行動だったみたいで、あつコートを貸してあげるなんて親切ですね？身内としては優しい子に育つてくれ

れて嬉しいかぎりです。

ですが

「僕と……付き合ってくれないか？」

「へ？」

ロッコンに育てた覚えはありますんっ――！

「僕は……（人質として）君が欲しいんだ。」

今までそんな様子はなかったのに……兄をこの手で始末しないといけなくなるなんて……

「命がけさ……一目見た瞬間から……君を……君を（人質として）やがりと決めていた」

「はい、ちよーーーーとじつに来ようか? ハヤテ君? (ギリギリギリ) わいのひとつでも可愛らしいお嬢さんはちよつと待つてねー? あ、あと君のお家の電話番号も教えてくれる?」

「かつ可愛い／／／・・・・・わ・・・・・わかつた・・・」

「じゃあ、ちよつと待つてね」
・・・・オラアー早く来い性

「ち、違うんだ！これはちょっと魔が……つて性犯罪者！？僕はただ身代金を……」

「・・・・・今ならまだ未遂で済むから・・・・・警察につと、公衆電話発見！――といあえず、保護者の方に連絡を・・・・「きや――――雪で滑つて――――そこをどいてください――」はいっ。」

目の前には迫り来る自転車が・・・・ドコンツー!

「「あ・・・お・・・う・・・げふ。」（バタ・・・・）」

こうして少年達の人生は、幕を閉じたのであつたあ（こゝ、本で
お送りしておりますう）

「あの……」みんなさー…………だ、大丈夫ですか?」

「「ててて…………」」

・・・・・生存能力は黒いG並みの少年達なのであつたあ(CV,
若 でお送りしていますつてばあ)

第四話 運命は英語で語られるトストイー（前書き）

お気に入りが9件になりました！！

ありがとうございます！！

第四話 運命は英語で語られるトステイー

arasside

「「あ……お……う……づふ。（バタ……）」」

「あの……」めんなさい……だ、大丈夫ですか？」

「「ててて……」」

ハヤテを抱えて避ける」とくらにはできたけど……あ
のタイミングで来られると避けるわけにはいかないじゃないですか、
避けたらこの女性が怪我をしてしまうかもせんでしたし

「あの……お医者さん呼びましょうつか？」

「……」

綺麗な人ですね～今まで見た女性の中でも一、二を争ひよつたな…

・・・って完全にハヤテは見とれちゃつてますね?

「あの・・・・・体は?」

「体がどうかしましたか? (スクッシュ)」

「(・・・・・・・)えっと・・・・・」

「(心配なく。頑丈だけが取り得ですか!)」

「(・・・・・・・・・)では、そちらの方は・・・・・」

「ああ、ぜんぜん大丈夫ですよ。」コレでも兄よりは丈夫ですから。

「あら、(じ)兄弟だったんですか? それは氣づきませんでした。」

「(お・・・・・驚いたよパトラッシュ)世の中にはこんなキレイな人がいるんだよ・・・・・お前は犬だからわからんないだろ(けど。)」

「(ハヤテは今絶対変なこと考えてんだるーな・・・)一応双子な

んですよ~。卵性なので似てませんけど・・・」

「 わうなんですか・・・えつと・・・そのお兄さんは本当に大丈夫ですか? ボーとしたりしゃこますけど?」

「 くつー?はい、 もちろん・・・頭はこつもゆるんでますからーーー。」

「 あの・・・」無事でしたらうれしお聞きしたいことがあるのですが・・・よひじいですか?」

「 え? なんでしょつか・・・?」

~~~~~

『 あなた、 恋人とかいますか?』

『 ーーー』

『 自転車であなたを轢いた瞬間思つたんです・・・これは運命。英語で言つてデステイニー。ですから私、あなたのことが・・・』

『 』

『 デキシデキデキ』

（なんて嬉しい展開に・・・せつかくのクリスマスだし・・・やつぱ・・・）

「ジト――（ハヤテの奴・・・絶対へんなこと考えてんだうな・・・ハア・・・）」

「（ハーン・・・本当に大丈夫かしら・・・）」

「・・・で、その子の特徴は？性別とか、来ている服の色とか、年齢とか・・・」

「女の子を探しているんです。13歳になるちひやい女の子なんですけど・・・」

「もしかして・・・パーティードレスとか着てませんでした？髪型はツインテールで・・・」

「やうなんす！あの」世間知らずだから・・・誘拐犯にだまされてヒョイヒョイついて行かないか心配で・・・って心当たりがあるのでですか？」

「はい、ちよつと今、自宅に電話。」「そいつ……」「ハフウ――ハ、  
ハヤテ……貴様……ガクッ」

「（借金を返すためにもここで失敗するわけにはいかないんだ！！）  
悪いですけど……知りませんよ……（誘拐する）予定が  
ありますから僕たちはこのへんで……」

「や、そうですか（弟さんがいきなり倒れかけたけど……大丈夫  
かしら？）……もう少し探してみます……あ――あの……  
ちょっと待って。」

「はっ？（フワッ）……え？」

「こんな寒い夜にそんな薄着でいると……風邪を引くちゃいま  
すよ……？」

「……（じわつ）えべつ……」

「え？」

「うあああああ……（ポロポロポロ）」

「ええ？え？え！？あの・・・・・私何か悪いことでも・・・・・！？」

「ごふつごふつ！・・・・・ハヤテ！お前いきなり殴りやがった・・・・・何この状況？？」

「あの！…その女の子ですか？・・・・・実は！…」

『誰か――――――――――』

## 第五話 特速80キロ（漫畫版）

田中君、ソーランキング乗れば……

おまえに入りも増えねば——！

と叫つ——と叫ぶ頑張ります——！

あと、一話あたつの大輔を巻くしたまつがいいのかな？

## 第五話 時速80キロ

「こんな寒い夜にそんな薄着でいると……風邪を引っちゃいま  
すよ……？」

「…………（じわじわべべべ）…………」

「え？」

「うあああああ…………（ポロポロポロ）」

「ええ？え？え！？あの…………私何が悪いことでも……  
！？」

「じふじふじふ……ハヤテーお前こきなつ殴りやがつた……  
何この状況？？」

「あの……その女の子ですか？…………実は……」

『誰か…………』

『ぐつぐつ…何をする…離せ…』

『うつるせえ…ちつちつ大人しくしろ…』

『くく…離せ…離せ…』

バタン

ブロロロロ・・・・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「田の前で誘拐されてつたよあの子・・・・・・」

「大変…あの子つたら…本当に誘拐されてる…どうしましょうどうしましょう…と…と…と…と…」

「…………自転車…………ちよつとお借りしますよ。あと警察に連絡を……」

「え? ゆりよ…………相一?」

「（）心配なく。僕が必ず追いついて、あの子を助けてみせます。」

「で……でも、相手は車よ……! そんな自転車なんかじや……絶対に追いつけるわけが（ゴッ）ない。……え?」

「ハヤテの奴いつもの一倍くらいに飛ばしてるな……? じゃあ、警察はお願いします!!」

「へ? 君は? (ギュオツ! -!) ……人間辞めてませんか?」

この一次創作の主人公は決して人間辞めてるわけではありません~、

一度死んでじゅつてしまふかたがお ( こゝ , waka o to o ですってば  
あ )

## 第五話 時速80キロ（後書き）

日刊ランキングに乗つてもお気に入りが増えなかつたら・・・・・

ガクブルガクブル・・・

## 第六話 その一ヶ月はハゲを隠すため・・・

「まつたくこうもあつさつ誘拐できるとはなーー。」

「一人になつてくれて助かつたぜーー。」

「・・・・・（怒）」

「ところでアニキ、先程から人質が恐ろしい殺意を持った目で睨んできているのだが・・・・」

「気にするなーー。」

「おい、そこの馬鹿一人・・・・お前達に少し頼みたいことがあるのだが・・・・」

「ふははははーー何だ小娘！？一得が泣き叫んだつて無駄だぜーー。」

「うちは借金で生きるか死ぬかの瀬戸際なんだーーちょっと大人しくしててもらおうかーー。」

「空気が汚れるから、呼吸をやめてくれないか？環境破壊だぞ。大切にしろよ、地球は。」

「…………」

「…………このガキ！－」

「まあ、待て！！人質殺したら元も子もねえ！！まだそいつの身元わかつてねーんだから。それとてめえも・・・・あんまりナメた口は利くなよー！こちとら博打で作った借金のせいだ、危ねーチワワに臓器狙われてる身だ・・・だからオレ達を怒らせると・・・少々痛い目見る事になるぜ。」

「だから…………呼吸するなと言つたろ？ハゲ！－」

「…………」

「…………この…………」

「つーかお前も、その馬鹿丸出しのグラサンはどこのファッショナリーダー気取りだ？それともあれか？宗教か？馬鹿の神様を光臨させる儀式の途中なのか？」

「てめえ、アニキのハゲは馬鹿にしても、グラサンだけは許せねえ

「ばつ！－！誰もハゲてねえ－よ－！」

「一」うなりや大人を馬鹿にするとどうなるか、身体に教えてやるぜ

「えー? 弟よー! いつからそんな子供好きに・・・・?」

ドカラ一ミシイー！

「ち・・・近寄るな変態・・・それ以上近づいたら・・・人を呼ぶぞ馬鹿者！！」

「はつ！－馬鹿はお前だ！－小娘！－時速80キロ以上でぶつじばす車に、呼べば来る奴がいるとも思うのか！？」

!

「だったら今すぐ呼んでみやがれ……」

ハヤテ――

「ゴウッ――――

「……なにい――」

ズガガガガガガ――

ギッ――

「おい、 いの悪党ども――おとなしくその子をかえ

「おい――ハヤテ危な

ドガア――――――

## 第七話 やり残したこと

「こらわーーー命がけで私をわいわいと誓つた。だから呼べば来るぞーーー！」

「だったら今すぐ呼んでみやがれ！！」

ハヤテ！！

ゴウシー！！

「！！なにい！！」

ギツ！！

「ねこ、の懸念じゃ……おとなしくねの子をかえ

「おい！！ハヤテ危な

ドガア…………

「あつ……アーキー！ アイシラ巻こあまこましたよ……もしかして……殺しちまつたんじや……」

「うせえ……いきなり田の前に出てくる奴が悪いんだよ……」

「おこ……お前達……よくも……よくも一人を……」

area SIDE

「おこ、この悪党ども……おとなしくその子をかえ

「おこ……ハヤテ危な

ドガア…………

ハヤテに少し遅れて誘拐犯の車に追いついたのはいいけど・・・見事に轢かれたなあ・・・ハヤテが勝手に飛び込むから・・・地面に落ちるまえにキャッチするのはいいけど・・・血でベッタリになるな・・・仕方ないか・・・つてんん??

クルクルクル・・・「ゴッ！バンッ！」（ハヤテが回転しながら車のボンネットに飛び乗った音）

「あ～～～悪いんだけど・・・その子を僕に・・・返してくれる？」

「「は・・・はい・・・」」

・・・心配なかつたか・・・血の残量以外は・・・

ウ～～～ファンファンファンファン

「おー、馬鹿アーチキ。わざわざ傷見せり。止血すつかり」

「ああ、『めんねアラシ』……」

「おー……お前その傷

「あ……よかつた無事だった?」

「ん……うん……私はね……」

「君が無事で……本当に良かった……」

「またお礼しなきやな。／＼／」

「だつたら……今度は僕らの……新しい仕事でも……見  
つけて

「おつとつ（ドスツ）グフウ……ハヤテ……」

「お前……オレに恨みでも……ガクッ」

「えー? も・・・・ もーーー」

「ナギ！！」

「おお……マリア……そいつの応急手当を頼む……私のケータイを……」

「へ?え、え~と。。」

薄れていく意識の中でやつしきのお姉さんの声を聞いた気がした・・・

## 第七話 やり残したこと（後書き）

「（ピッ）クラウス、私だ。位置はわかるな？大至急医療班を手配してくれ。1分以内だ。」

「あの・・・とつあえず見た田ほどひどいケガではなさそうですよ。弟さんの方は傷一つありませんし・・・」

「な、なにい！？」

この作品の主人公は某公式チートさんと同等の頑丈さで御座います  
う（CV・ZW）

## 第八話 お風呂はロマンが詰まつてこむ

「IJの男たちを……私の新しい執事にする。」

「…………えっと、話の流れがよく理解できないのですが……」

「ま……命の恩人の頼みというのもあるが……なんと言  
うか、その……そつちの男に告白されたんだ。さつき公園で  
……とても情熱的に……『君をさらいたい』とかなんとか…  
……こつちの男も……私のことを……とつ……とつても  
可愛らしい……お嬢さんって……（カアアアア／＼／＼）」

「はあー？」

\*\*\*\*\*

「『』兄弟のお兄さんの方はまあ確かに、頭を相当激しく打つたようですが・・・・・命に別状はありませんよ、命には・・・おそらく日ごろからかなりしつかり鍛えていたのでしょうか。驚異的な頑丈さですよ・・・・・頭は元から悪そうですし、顔も貧相ですが・・・・・兄弟さんの方は・・・・・本当に時速80キロの車に轢かれたのか？つてくらいなんともありません。お兄さんよりもさらに鍛えていたのでしょうか。・・・・・彼はもう私達と同じ人間なのか怪しいくらいですよ。気を失った原因はただの睡眠不足でしょう。最近しつかり寝ていなかつたんじゃないですかね？まあ、何かあれば呼んでください。」

「はい先生、ありがとうございました。」

「で？どうしてきさつがあつたんですか？」

「何が？」

「何がって・・・・・あの『』兄弟とのいきさつですよ。お兄さんは自転車で車に追いついたり、その車に轢かれても命に別状はなかつた

り・・・弟さんは走つて車に追いついてお兄さん同様轢かれて無傷  
だつたり・・・もはや人にカテゴリされるのかわからないと思う  
んですけど。」

「そりやあ私の執事になる兄弟だ。きっと体は新造細胞とかででき  
ているに違いない！！」

「いいんですか、人間じゃなくて？」

~~~~~ナギがマリアに事情説明中~~~~~

「ま・・概ねナギの方の事情は理解しました。あの方達が起きたら
知らせますから白室について下さい。」

「つむ、わかった。とにかくあいつらを私の執事にするから。」

バタンツ

「（やめてきて・・・・・・どうしたものでしょつか・・・・・・）」

「うーん……。」だ? いやせざりや? うーん。

目の前にはものうすゞく豪華な調度品の数々が・・・

この小説の主人公はよ～～～く！兄のこと理解しております
う（こゝ・わ）

ガチヤ

「とりあえず誰か人を見つけてハヤテの事を聞かないといふ。
・・・こっちのほうから人の気配がする。」

廊下に出て人の気配がするほうへ向かつて行く。

それにしても……この家……いや、屋敷はとても広い割りに人の気配が少ないな？

一番近い人の元に着くまでに一分は掛かりそうだ。

「（あつ人がいる！）あの～～？」

「ムウ？誰かな？」の三千院の屋敷を無断でウロついて変質者は・・・

「へ？」

「おじさんいきなり何を言つてるんだ？」

「成敗してくれる！…喰らうが良い！…クラウスキー――ツク！」

「…」

「はい！…『氣合防御』！…」

ガキイン!!

「その身のこなし・・・・只者ではない・・・・お前は何者だ?」

~~~~~状況説明中~~~~~

「先程お嬢様が運ばれてきた方でしたか。こ、これは失礼しました。このたびはお嬢様を助けていただいてありがとうございます。あと、お兄様のお部屋は申し訳ありませんが私は存じ上げておりません」

「そうですか・・・・わかりました、とりあえず部屋に戻つておきます。これ以上動き回つてすれ違いになつてしまつたら大変です」

「申し訳ありません。早急に対処しますので・・」

「いえいえ良いんです。兄は少しに抜けているところがあるので心配だつただけですか?」

「いえ、お嬢様からは客人として迎えるように申し付かつておりま

す。確認してきますのでこの部屋でお待ちになつていて下さい、すぐ使いのものを出しますので。」

「そうですか……ならお願ひします。」

ガチャ

バタン

「綾崎アラシ……あの身のこなし……姫神の公認に最適かも知れんな? 考えておこう。」

「うしてアラシはこの屋敷の執事長クラウスに認められたのであります。」

「……その頃ハヤテは……」

「……それにしても、本当に頑丈なんですね……体……」

「

「へ？」

「だつて・・・あんなに激しく車にひかれたのに・・・命に別状はないといえ、深い傷を負っているのにお風呂に入るなんて・・・」

「

「・・・・・・・・

「普通だつたら、傷口が開いたらこりますよ～」

「・・・・・・

「・・・・・・

「ゴフアツーーーーーーーー

「キヤアアアアアーーーーーーーー

大浴場で今度こそ本当に死に掛けていたらしい

## 第八話 お風呂にはロマンが詰まっている（後書き）

なぜ、ナギが誘拐されたときにハヤテしか呼ばなかつたのかと言いますと、ただ単に名前を知らなかつただけなんです。

請求書の裏にはハヤテの名前しかなかつたのです。

アラシはもともと

「クリスマスプレゼントなんて要らない！（サンタが嫌いなため）

」

と言つていたので「うなりました。

## 第九話 白白自爆

hayateSIDE

ああ・・・今度こそ本当に死んだな・・・あんな深い傷を負つてたのに今の状況を夢と勘違いしてお風呂に入っちゃうなんて・・・

いや・・・もしかしてこれは死ぬ前に神様が見させてくれた夢なのかな?

アラシには悪いけど・・・田を開けば今度こそ・・・ネロとパトラシシューがいる天国で・・・

「さつさと起きる、このバカ兄貴!」(ドスッ!)

「ガフウ!ア、アラシ・・・僕は死んだはずじゃ・・・?

「お田覚めですか?綾先ハヤテ君?」

「あ・・・あなたは・・・さつさとお風呂場で・・・」

「すつと……お屋敷に運ばれてからすつと寝ましたが大丈夫ですか？」

「…………」

「僕…………すつと寝てましたか？」

「…………すつと寝てましたよ……」

「（ジイ~~~~~）」

「…………いやあやつぱり…………あれは夢だったんだ。ん？  
あれ…………？それにしてもなんでこんなにフトンが濡れて…………？」

「……ね…………寝汗ですよ寝汗！！ハヤテ君、すくべうなされていましたから。」

「（ジイ~~~~~）」

「……せつからどうしてアラシはそんな目で僕を見るの？」

「いや～～べつに～～～？予感が当たつたんだな～～つて思つてただけだから気にしないで？（ジッ・・・ト～～～～）」

「ま、まあこいいけど……あ、でもわざわざからだいしてメイドさんは僕の名を？…………てこうか、こじりびこですか？」

「え～～～と

## 説明中

「ハヤテ君の名前はこれから……悪ことは思いましたが……中を見させていただきました。」

「あ  
・  
・  
・  
」

「しかし大変な状況のようですね。」

「いやあ、たいしたことないですよ・・・・アラシもいふことです

し。」

「それは頼もしいですね。ところでハヤテ君、お嬢様が来る前に少しお話したいことがあるのですが……その……先程のお嬢様との公園での一件について……」

「（ペキッ）（

「（）」れはフオローが必要になりそうだな……）

「せうとがせうとが言つたといつ……」

「スミマセン……スミマセン……誘拐なんて一度と

「……」

「……え？……誘拐？」

「……（まひー）」

白田

隠していたことを自分から打ち明けること。

自爆

今のマイツのような状況。

「ええっと・・・少しお話を聞かせてもらひますか？」

「は・・・はい・・・」

その後被告の弁明は30分以上続いたといふ・・・

「はあ～～～、この馬鹿は・・・全く・・・」

## 第九話 白白 自爆（後書き）

感想、評価をお願いしますーー！

## 第十話 カラ回の想い（前書き）

作者帰宅後・・・・・

「ふ～んふ～んふ～ん（ポチツウイ～ン）・・・感想の確認しないと・・・ん？・・んん！？ひょ・・・評価がすごいことになつとる！～」

日刊ランディング66位に載つてました・・・

ありがとうございます！～！～！

## 第十話 カラ回る想い

arashi SIDE

「…………なるほど。ハヤテ君達の方の事情は理解しました。」

「その…………お嬢さまのことを知らないとか、嘘をついた事も謝りますから…………どうか…………この件についてはどうか見逃してほしいというか…………」

「本当は僕が『自宅に電話する直前だつたんです。迷子だつて言つことはすぐにわかりましたから…………兄も魔が差してしまつただけなんです。どうか、見逃してもらひませんか…………?』

「いやまあ確かに…………人は仕方なく嘘をつくというのもありますし…………」

まったく…………ハヤテが最初から誘拐なんて考えなきゃこんな事にならなかつたのに…………  
でもどうにか見逃してもらえそつて助かつた…………

「と、いつか実は……ハヤテ君の『セリフ』とかどいつもセリフとアラシ君の『可憐な』お嬢さん』といつセリフを……

・・・あの子がですね~」

「おおなんだ、もつ起きていたのか。」

「あ・・・・・・」

「どうだ? 体の具合は?」

「うふ・・・・・もつ平氣・・・・ありがとい。」

「ハヤテはともかく僕はただの寝不足みたいだつたからもつ大丈夫だよ。」

「でも・・・・・わつきは「メン。公園で・・・あんな」と(誘拐未遂)・・・・・」

「僕も・・・もつと(兄を)抑えられた良かつたんだけど・・・」

「ん・・・いやその・・・・・(生まれて初めての愛の告白)・・・」

しかも一人同時から……驚いたけど……嫌ではなかつた  
し……ただ私達は互いの事をよく知らないから……やつ  
ぱりすぐこつてのはよくないといふか……ぢからかを選べつて  
言われても選べないつていうか……

「…………（あれ～～～）の子達見事に誤解しまくつてませ  
んか～～～」  
「……」

「うん……やうだね……（誘拐未遂の罪悪感）」

「たしかにそのとおりだと思つ……（兄を未遂とはいえ止められ  
なかつた罪悪感）」

「で……私もあれから考えたのだが……お前達、仕事探  
していただろ？」「……」

「え？」「うん……」

「だつたらこの家で……私の執事をやらないか！？」

「…………執事？」

「あの、お嬢さま……そういうのはよく事情を聞いてからの方が…」

「けど、姫神の後任は必要だぞ。姫神の後任がないから誘拐とかされるわけだし・・・・・!」

「執事」

こんな僕達に・・・住み込みの仕事をくれるなんて・・・なん  
て優しいんだ・・・

「でもハヤテ君とアラシ君は・・・執事ってどんな仕事かもわから  
な  
」

「アリサ…アリサ…」

「お任せ下さいお嬢さま！－何があるにしと僕らが命をかけて・・・・・あなたをお守りいたします！－」

「そのとおりですーーたとえテロリストに狙われてもお嬢さまを無傷で守り通して見せますーー」「

「ば・・・・・ばか・・・・・マコアの前で照れるよつた事を言つた  
・・・」

「（ど・・・どひこましょ・・・どひこましょ・・・）の天然さん達  
は・・・」

こうしてただ一人事情を理解しているメイドさん以外は、全くもつ  
て不毛な方向にカラ回るのであつたあ・・・・・

## 第十一話 「・・・マリア・・・それは人間ではない・・・どこかのDr・・・」

決して主人公はロボットなんかじゃありませんよ！！

## 第十一話 「・・・・・マリア・・・・それは人間ではない・・・・・ビレカのD・・・

「新しい執事？」

「ええ、お嬢さまがお雇いになると・・・・・どうします？・クラウスさん。」

「「ひむか・・・・・執事長としては姫神の後任が欲しいところであるし、あのアラシという男の身のこなしさは只者では・・・・・どんな兄弟なのだ？・その綾崎兄弟は・・・・・」

「ええと・・・・・そうですねえ～～お兄さんのハヤテ君は時速80キロで暴走する車に自転車で追いついて、そのまま「!!」のように轢かれても平気だったりする子ですか？」

「・・・・・マリアよ・・・・・それはどこのガンダムだ？」

「いえ・・・・・一応人間ですけど・・・・・弟さんのアラシ君は時速80キロで暴走する車に走つて追いついて、そのまま「!!」のように轢かれても傷一つ付かない子です」

「・・・・マリア・・・それは人間ではない・・・・どこかのDr.スランプが造った人間型アンドロイドだ・・・・」

「一応人間のはずですよ・・・。アンドロイドの件は否定できませんが・・・」

バタンツ

「ふ～～～～～、一応どうにかなつそつですけど・・・・・試験です  
かあ・・・・・」

~~~~~

「え？この屋敷つて3人しか住んでいないの？」

「ああ。この家は別宅の中でも特に小さいからな。たいして使用人は要らないんだ。」

「・・・アラシ・・・これがブルジョワつてヤツなのかな・・・？」

「・・・僕に聞いても分かる訳ないだろ？で、お嬢さま、何故わざわざその小さい別宅に住んでいるのですか？」

「うむ、私は小さくて狭い家の方が落ち着くからな。
まつたく・・・ビンボー人の僕達がそんなことを知ってる訳ないじやないか。」

「うむ、私は小さくて狭い家の方が落ち着くからな。」

「「「そうか（ですか）」」

この僕達にとつてのお屋敷がお嬢さまにとつては小さくて狭い家・・・
これが価値観の差というヤツなんだなあ・・・

「でもそんなに人が少ないと余計に緊張しちゃうな。」

「？？何を言つているのだ？」

「だつて、住み込みつて事は僕もこの屋敷に居候するわけでしょ？」

「それはそうなるな。」

「だからその・・・いくら云いとはいえ可愛い女の子と・・・一つ屋根の下つていつ状況は・・・やっぱ緊張しちゃうつていつか・・・その・・・」

「たしかにハヤテの言つとおりだな・・・」

可愛い女性と可愛い女の子の2人がこのお屋敷には住んでいるから
なあ・・・

ああ、あと髪の人もいたっけ？

「バカ！！そんなふうな言い方をするな。こつちまでテレれるじゃないか！／＼・・・大体一つ屋根の下と言つても・・一緒に部屋で寝泊りするわけじゃないし・・・人の出入りもそこそこあるから・・・そもそも2対1つてゆうのは・・・」

「でもやつぱり緊張しちゃうよ。マコアさんみたいなキーレーな人と一緒だと…………」

「…………」

「フツー（ドカツー）」

「ゴフカー……ア、アラシ……いきなりビリース……て？……ガクツ」

「お嬢さま、愚兄が変なことを口走りましたので処理しました。『可愛い女の子』の中にお嬢さまを含めないとは……」

「……よくやつた。私が48の殺人技と52のサブミッションを連續でかける手間が省けた……私はもう寝る！！ハヤテによ～～くつ～～!!!!」

「任せのままに」

「ギィイイイバタンッ!!

「あの……どうなさいたんですか？」

「いえ、気にしないでください。兄の悪い癖が出ただけですから・・・

近いうちに兄の女心のわからなさを矯正したいと思った弟君なので
あつたあ

第十一話 「・・・マリア・・・それは人間ではない・・・ビンガのDr・・・

聞いて下せえ・・・・

十話をアップしてから仮眠を取つたり夕飯食べたりしていたのです
よ・・・・

その後この十一話を書いていたのですが・・・・

この数時間で日刊ランキンングが20位近く上がつていました。

『頑張ろ!』と思いました・・・・

第十一話 今日から執事…（前書き）

最近作業用BGMに千本桜を使っております。

キーボードを叩く速度が上がるんです。やはりテンポのいい曲だからだと思つんですけど・・・

他に何かテンポのいい曲でオススメってありますかね？教えて下さると嬉しいです^ ^

第十一話 今日から執事…！

araside

翌朝・・・・・

「おお・・・」れはれは・・・アラシはびひへ。」

「執事服つて着るのは初めて着たけど・・・でもこのサイズが合つものが都合よく・・・」

「サイズはびひですか？」

「はーーー。ピッタリですーーー。」

「はー、ピッタリなんですか、あの・・・もしかしてコレって・・・マコトさんがあの後仕立て直したなん？」とありますよね？

「あー・・・アラシ君よく気がつきましたね？」

「え？」れマコトさんが・・・・・？

「昨日はもう遅かったのに・・・ありがと「ハヤテ」、マリアさん」

「いえいえ・・・それだけ感謝してくれれば十分ですよ。では・・・お仕事に参りましようか。」

「それで・・・仕事はどんな事をするんですか?」

「ハヤテ、今は年末だし掃除じゃないか?料理は最低でも試食してもらつて許可がでてからだらう・・・」

「ん~そうですね~・・・アラシ君の皿ひとつおつておつて端からお掃除ですかね~?」

掃除か・・・ならどうにかできそうだな・・・ここを追い出されたらハヤテの不幸体質ですぐさま借金取りに捕まりそうな気がするし・

・・・・・

ハヤテ&トトロ「（がごめんね。……）」

「あ～お嬢さまよひやれこまか。」

「ん～ああ、おまかこマコア。」

「お嬢さま、お早づ御座います。昨夜はよく眠れましたか？」

（ツ）

「う・・・う、おはよマリス。き、昨日はしつかり眠れたぞーー／今日からしつかり頼むだ？」

「見てトトロお嬢さま？」の服・・・マリアさんが仕立て直してくれたんですよ？」

「・・・（ジ――――）」

「て、あれ？」

「悪かったな……どうせ私にはできませんよ……」

「（・・・・？）」

「ま・・・しつかり頼むぞ・・・あと私の書斎には近づくなよ。」

「・・・なんか僕のときだけ急に冷たくなった気がするんですけど・・・」

「自業自得だよ・・・」

「どうやらかと云つて・・・熱くなつすぎている気がしますけど・・・」

「・

「まーー何にしてもーー失つた信頼は・・・仕事で取り戻して見せますよーーー」

「え？あの・・・・・」

「あーーこれ掃除道具ですねーー任せてくれこーーーまずはあつちの

部屋からピカピカにして見せますから……つねにおねがんばるぞ～～～～～

～～～

「 ～ ～ ～ ～ ～ 」

「 ～ ～ ～ じやあ、僕はこいつの部屋からやつてこきますね？お嬢さまのためにがんばります。 」

「 あ、はい。お願ひしますね。 」

～～～～～～～～～～～～～

第十一話 今日から執事……（後書き）

今回は長さが微妙で区切りが悪かったのでここで切れます。

いつもより短いですが今日中にもう一話上げますので、勘弁を……

第十二話 嫌な予感（前書き）

お気に入りが100件を突破してヒヤツハ――な気分です――！――！

第十一話 嫌な予感

「あーーーこれ掃除道具ですねーー任せてくれーーーまずはあっちの部屋からピカピカにして見せますからーーーつかねおおお頑張るやーーー！」

「「「」」

「・・・じゃあ、僕はこっちの部屋からやつてこきますねーお嬢さまのために頑張ってきます。」

「あ、はー。お願いしますね。」

~~~~~

「（・・・わつものは良くなかった・・・わつものような事での態度では、いくらなんでも心が狭すぎる・・・）」

「あー、1J2な所に？」の時間は書斎かと思つていきましたけど？

「ん？ああ・・・調子が悪くてな・・・ハヤテとアラシは？」

「お掃除を手伝つてもひつてこませ。やる気満々溢れていますわ。

「

「書斎には近づかせないでくれよ。あと・・・私の事、何か言つていたか?」

「ハヤテ君はお嬢さまの信頼を得るために、アラシ君はお嬢さまの為に頑張るといつてましたよ。まあ、何か思うことがあるなら・・・直接お話になつた方がよろしいかと思いますけど・・・」

「そ・・・そだなー。まずはお互ひ話をするのが大事だなー。」

「はい? (特にあなた達はね・・・)」

「じゃあちよつと二人のところに行つてくるー。」

「やんわり誤解を解いてくるんですよ~~~?」

ギィイイバタンッ

タツタツタツタツタツタツタツタツタツタツタツタツタツタツタツタツ

ガチャ

「あの……マリアさん……一部屋、掃除が終わったので見に来てく  
れませんか！？」

「いえ……ハヤテ君とナギはことん噛み合わないなあ……  
と。」

\*\*\*\*\*

「でもまだ一時間も経つてませんけど……」

「はい……とりあえず手順を確認してもらいたくて……」

「手順って……え？ なんだか……す、キレイですね……」

「やつですか！？ ありがと、これでこますーーー！」

~~~~~ハヤテ手順説明中~~~~~

知りたい方は後書き参照

「それにしても感心しました。ハヤテ君……お掃除とても上手なんですね。」

「え？ そうですか？ ありがとうございます！ 一高級品は特別な手順があるのかもって不安だったんですよ。」

「いえ、全部正解ですけど……よくご存知でしたね？ そんなこと……」

「いやあ～～9歳の頃から年齢偽って清掃のバイトで親の酒代稼いでましたから～／＼／＼って言つても全部アラシが教えてくれたことなんですか？ 僕よりも掃除が上手なんですよ～～」

「（言葉の端々に笑えない話を自然に入れていきますね……どう返していいのかわかりませんよ……）…………ではその調子で次の部屋もお願ひできますか？」

「はい……喜んで……」

ギィイイバタンッ

タツタツタツタツタツタ

「（クラウスさん・・・ハヤテ君たちなら簡単に試験を突破してしまいそうですよ・・・ていうか、アラシ君は小さい頃からすこかつたんですねえ）・・・あ！？ そういえば・・・書斎のこと言ひ忘れていましたけど・・・大丈夫かしら・・・？」

しかし久しぶりに人に褒められた少年は調子に乗っていたあ

「よーーしー！」のまま屋敷中を掃除して・・・もっとマリアさんに褒めてもらおう！ そうすればお嬢さまの機嫌も良くなるに違いない！ そのためにはまず・・・この迷路のような屋敷の構造を理解しなくては・・・」

～～～屋敷のとある一室～～～

「（ゾクッ）・・・なにやらハヤテが変な事をしてお嬢さまを怒らせて屋敷から追い出される気がする・・・」

後にアラシが『あの時止めに行つておけば……』と後悔する」と
になるのは必然であったのだろう

「う～ん……すっかり迷子だ……」

必然であつたのでえすう

(C)「フグタく～ん」がお送りしましたあ

第十二話 嫌な予感（後書き）

「あーり?」れは・・・

「はー!…そちらの取つ手は銀製だったんでシルバーダスターを使つて磨きました。」

「え?」

「このひの銅像は真鍮しんきゅうブラシで汚れを取つた後、薄い中性洗剤で洗淨して・・・水氣を取つてワックスで仕上げました。カーペットはウール製のキリムだつたのでお湯を使わず、冷水に頭髪用洗剤と塩を少し加えて、色落ちしないように気をつけて軽く・・・つてあの僕マズイことでもしきやいました?」

「いえ・・・素直に驚いているんですよ。」

第十四話 予感的中（前書き）

ただ今の時刻

3 : 3 2

ひたすら眠いつス

第十四話 予感的中

hayate SHIDE

「う、うん……すっかり迷子だ……」

屋敷の構造を把握しようとして走り出したのがちょうど一〇分ぐら
い前だつたけど……迷子になるほど広いのにどうやらくんが小さい
んだろう？

「しかし本当に広いなあ……いつたい幾つ部屋があるんだろう
う？そしてまた……新しい部屋が……」

見つけた部屋に片つ端から入つてみてるけど……全く人の気配が
しないよ……

「ここはまたハズレかな？」

《書斎》

ガチャリ……

「あ・・・でも・・・」これは結構・・・人の気配がする・・・ん?」

なんだこのノート・・・

お嬢ちゃんの学習ノートかな?

「な・・・」・・・これはーーー!」

【あっしのマジカルパワーで・・・・・・! 決着をつけ
てやる! ! !】

↙マジカル全滅ビーム! ! !

「な・・・・・つーーーなにいーーー!」

カツ! !

くつくつく・・・・・なかなかやるな・・・・だが私に
は効かぬわあ! !

【ば・・・・・ばかな! ! ! あっしのマジカル絶滅ビーム
が! !】

だめだよブリトニーちゃん! ! ! アイツにはマジカルパ
ワーが効かないんだ! !

「…………絵日記へ」

「い……いかん……」んなプライベートなものの見ては……「んなこと……こんなことお嬢さまに知られたら……」

「お……人の部屋で何を勝手に見てこる……」

「お、お嬢さま……いえ……」……「これはその……」

「あ……それは私のまん……」

「だ……大丈夫です……ほとんど読んませんから……お嬢さまの「」の絵日記は……」

「キッ……」

「あ……あれ？」

「え……絵日記……だと……」

「はい！・・・え？あれ？」

お嬢さまの後ろに『おおおおおおお』って文字が見える気が…・・・?

「こ・・・この・・・・・バカア！－！」

「お・・・お嬢さまあー?」

「うるさい！！お前なんかもう知るもんか！！人の気持ちも知らないで！！！ハヤテのバカ！！バカバカバカ！！！」

ガッシュヤーノン（門の閉まる音）

「あんなに怒らせてしまつては・・・・もつ合はせる顔が・・・・」

あれは・・・よつほど大事な絵日記だつたんだなあ・・・さよなら
アラシ・・・僕はまた違うところで住み込み仕事を探すよ・・・
仕事を見つけたらすぐに会いに来るから・・・

トントンタント

「ん？」

「やあハヤテ君。よつやく合えたな・・・」

「あ・・・じつも・・・」

「借金取りが現れた！！

「めとアリシ・・・もつ合えないかも・・・

「オラアー・さつさと乗れ！-！」

「おい、一人足りなくねえか？」

「ああん？・・・チツ、ならトイシから一倍臓器をとつやいいだろ

？」

「ハヤイイイ！・！・！」

ブローバンク
・・・・・

「何がだ？」

「ハヤテ君本当に出て行つてしまいましてけど・・・・・・」

「は！？いやいや！私は部屋から出て行けと言つただけで、屋敷から出て行けなんていつたつもりは・・・・・！」「

その頃

キユツキユツキユツキユ
・・・・・

「ふう・・・・・」それで二十部屋田も終わひとつ・・・（ヒハイハイ！）

)
んん！？
」

第十四話 予感的中（後書き）

アラシの累計掃除時間

1時間37分

掃除した部屋の数

20部屋

第十五話 天邪鬼

「しかしほう……世の中には酷い親もいたもんだ。自分達が博打で打つた借金の返済に、自分の息子を売るなんて……」こんな親、もう人として最低だな。」

「まつたく……日本ついでに國はなつちまつですかね~」

「ほんとほんと 売られる子供の身にもなれつて話ですよね?」

「ま、それでも賣つんだけどな。」

「ですよね~~~~~(、・・・)」

「ひつて少年のつかの間の辯せ(累計1~3時間程度)は終わりを告げた・・・・・

~~~~~

「は~~~・・・・外は寒そりですね~・・・・」こんな寒空の下、帰る家もないのに追い出されたら・・・・ややかし辛いでしょ~うね~

~~~~~

ピキッ・・・

「わっ・・・私は部屋から出て行けと言つただけだ・・・それなのに何を・・・・・！大体出て行けと言われたくらいで出て行く奴がいるか！・！それに掃除とはいえ、人の部屋に勝手に入るなど・・・怒鳴られたつて文句は言えまい・・・」

「まあ、怒鳴つた理由は部屋に入られた事よりも・・・せつかくの自信作を『絵日記』呼ばわりされた事にあるような気がしますけど・・・」

ギクッ！

「そもそも大事な物をしまう癖をつけないからこんな事になるんですよ？」

グサッ！

「日頃から部屋の掃除は人任せ、着ていたものは脱ぎっぱなし、身の回りの物くらい自分で整理する癖をつけなさいって日頃からあれほど言つてゐるのに・・・」

ザクッ！

「それにあればハヤテ君の失敗と言つより・・・ちゃんと注意しなかつた私失敗ですし・・・いいんですか？」のままで・・・・・

「...」(シーン)「...」

「まあ・・・でもお嬢さまがそこまでおっしゃるのでしたら仕方ありません・・・・・・・・ハヤテ君の事はこのまま忘れましょうー!」

「えつ？」

「元々ハヤテ君はお嬢さまが独断で雇うと決めただけ人・・・そのお嬢さまが『もう用無し』と言うのなら、もはや引き止める理由もないですし・・・」

「え? いや・・・・! ? それはその・・・・」

「それに執事はアラシ君一人でも十分だと思いますし・・・ハヤテ君の事を嫌いになつたのならむしろこのままの方が・・・」

「いや！ ！ だからキレイになんか

「キライになんか？・・・なんかの後は何ですか？」

「なんかの後は何が続くのでしょうか～～～」

「ゴホンッ・・・ま、ハヤテは恩人だ。恩人を見捨てるようなマネ・・・三千院の人間として・・・するわけにはいかん！！」

「・・・・・本当にこの子は・・・・天邪鬼なんですから・・・・

「・・・・何か言つたか？」

「何か聞こえました？（ニロシ）・・・でも、ビリヤつてハヤテ君を探すんですか？」

「なあに、どうせハヤテなら・・・すぐに借錢取りに捕まつてはすだ。ヤクザでも金貸しなり三千院家の情報網で見つからないはずがない。」

ピッ・・・トゥルルル・・・トゥルルル・・・ガチャ

「はい、こちらクラウスでござります。」

「クラウス、私だ。大至急、調査と手配してもらいたい物がある・・・

・・・・

「……かしこまつました。では、30分程お待ち下さい。」

……ピッ

「ふう……さてどうぞ……では、マリア……後は任せた。」

「はー? ……まさかと思ひますけど……今更『ちょっとと言ひ過ぎたかな?』とか思つて、それで私に行けとか言つてゐるのではないかですね? …?」

「…………」

「お嬢さまがハヤテ君の主ですね?」

「じょ……冗談だよ[冗談]! ……自分で行くに決まつてゐるだろ! …?」

「ですよね? ……だそりですよ……アラシ君?」

……ガチャ

「お嬢さま……勿論!」一緒にさせていただきます。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1276ba/>

アラシのごとく！

2012年1月8日18時53分発行